

(研究会の記録)

[脇・心霊講座より]

神霊主義の健康法

脇長生

編集解説：以下の脇主幹の講演は 1970 年代半ばのものですが、この主張する点は現在において通じることでもあり、ご紹介することにしました。

巷間の健康法と医学の取り組み

「健康は財産以上」といい、「健康は金では買えないもの」という。しかし、日本人は病気になれた人種・民族と言われるほど、病にはモロいのである。何といっても三人に一人、四人に一人は、風邪を含めて何らかの病気に罹っている、と、統計は如実に物語っているのである。間違いはなからう。

中には医者にかかっていることを誇りと考え、名誉でもあるかのように、「私は医学博士にかかっている」と誇らしげに威張っている婦人を知っている。

とはいえ、風邪くらいなれば左程でもないが、重患といい、大病といい、生命にかかわる（もっとも、その公算が大なのは、なんと言っても“ガン”であろう）といわれる病人になると、いくら信頼しきっていた現代医学の叡智を駆使しても治らないものが多い。そこで治りそうにもないとなると、八方手を尽くすことになる。どうやらこの辺りから健康は金では買えないも、財産“以上”の価値を認めるようになってくる。

生まれた時から不治とみてよい病気に罹っている赤ちゃん。病院にかかりながらも、結局は見放されることになる奇病が多く発見され、その治療法の確立がなかなか困難な現状である。

こういう世相になった今日。一般の人々は知らず知らず、「このままではどうなることか」と不安な気持ちにさせられている。こうしたことから健康な状態へと復するためには、もっとも正しい健康法に頼る以外に道はないのではと、そしてどこかにそれに応えてくれる健康法はないかと、目を光らせる。

これに目をつけたのが出版界。近頃の新聞雑誌を見ると科学的根拠が曖昧ないろいろの「健康法」の新刊書の広告で溢れかえっている（注。現在はテレビコマーシャル等の広告手段で大々的に宣伝をしている）。一般の人たちはこれにヒックかかる。

この新刊本、思い当たるものでもその数は多い。朝鮮人参健康法（このように何にで

も、「健康法」というタイトルがくっつく) クコ、コンフリ、これらによる健康法の流行も今や過去のものとなり、今では椎茸、サルノコシカケ、いろいろの野草の青汁、アロエ、黒ゴマ、等々。遂には、一品では間に合わないと、二種以上の組み合わせとなる。たとえば「玄米・野菜健康法」という具合。今にどんな健康法が飛び出すことやら、と一昨年の「心霊と人生」誌の年末号でも述べたことである。

ところが、それらが「流行」というものの圏内にあることがはっきりした。もはや、今日ではこのブームはどこかへ消え去ってしまった感がある。しかしまた、ボチボチと次からつぎへと食品外の健康法が作り出されてきた。

自然治癒力と心身医学

人間の健康を守る。病気を未然に防ぐ。こうした態度は大切なことで、これは人間自ら有している能力の一つとして具わっている。これを一言でいえば「自然治癒力」「良能」なのである。この点に目をつけたのは医学の中の生理学でもあるが、それをややおろそかに(?)して、薬や外科手術で治そうとして、今日の治療医学が進んだのである。とはいえ、ホンの一部の学者、数少ない医師の手で、これ(「自然治癒力」)を応用とか援用しようとしてはいるが、それで完全とはいえない結果から、ハッキリした健康への道にはなっていない。もっとも、この意見は心身医学の領域での声である。このようにハッキリしないところをわれわれから見ると、まだまだ人間を病気にさせ、あるいは健康を害している原因があるはずである。それは目にこそ見えないが、あるものが働いている結果であり、早く一般の人々にも知らせたいものだと思う。

ところが、今日の唯物時代では目に見えるものでなければ問題にされない。それに対して「神霊主義の健康」は、実際のところ目に見えないものの応用であるため、“早く知らせたい”といったところで、聞く耳をもっていなければ、普及の方法としては、われわれの周辺から声を大にして隣人より隣人に叫ぶ以外にはない。

何にしても「心身医学」は医学の一部であり、肉体を対象にして人間を考え、治療を考えた医学の誤りをやっとな反省している。だが、今も従前の通りの考え方を踏襲している医師が多い。そうした中から精神(心)というものを中心とした治療であるべきとして、「一元ではない、二元の一元だ」と言い出した心身医学が、精神医学の上の心身医学であると考えるのはまた、間違いであって、「全人間治療のすべてに、この医学は応用すべきだ」と、国際的に近頃叫びだしたことは頼もしいかぎりである。しかも、この先達を務めるのは日本の医学者であると言っている。「医学は東洋に帰れ」というのである。

参考のために、この発表は医学専門の週刊「日本医事新報」誌上に報告されている。

その一節を紹介すると……

「小見出し」として「医学は東洋に帰れ」とある(九大・心療内科・池見教授の発表)。

「臨床医学の中核としての心身医学をどのように教育し、どのように実践すべき時期にきているということである。

世阿弥の言葉には、『初心を忘るべからず』とあるが、このような心身医学の国際的な転換期にあたって、日本が重要な役割を果たす立場に立たされたことは、アレキシス・カレル(注。フランスの外科医で社会学者、生物学者。1912年ノーベル医学・生理学賞受賞。心霊科学の研究に造詣が深い)の「医学は東洋へ帰れ」という予言に深くつながるものではなからうか。

今日では自律訓練法、精神治療薬、行動療法、生体フィードバック法などの新しい療法が相次いで出現し、一方人間学的な精神療法(現存在分析、実存分析)平易で実用的な精神分析的療法(交流分析など)が発展してきている。これらの諸療法と日本的な森田療法、絶食療法など、オーソドックスな身体療法を巧みに組み合わせて、症例に応じて柔軟に選択的に使い分ける方向に、日本の心身医学会は動いているようである。しかし現在までのところ、各療法の間に関連について、まとまった見解に欠けるために、治療の上での混乱があり、諸外国でも同様の混乱が見られる。そこで東洋が持つ心身一如の英知のもとに、総合医学的な療法を体系化し、実際化することが、学会でも切実な要請となってきた。

神霊主義健康法の基本

一般の人たちにこの神霊主義による健康法を理解してもらうため、できるだけ平易な言葉で述べてみることにする。

神霊主義思想は、心霊科学と自然科学の双方が組み合わされて成立した「人生の指導原理」であって、むやみに“霊”とか“霊魂”などと主張しているのではない。しかし、心霊科学が基本になるということだけは認める必要がある。それは、肉体は物質であって生き物ではないということ。それが生命的存在であるということは細胞が生きているからである。その細胞の活力の根原を深く研究して行くと、どうやら心霊科学の結論に従わなければならないことになる。すなわち、自然科学の結論は、一度は心霊科学の洗礼を受ける必要があるわけである。

神霊主義的健康法とは、その思想に基づく健康法である。言い換えれば、「物心一如」「心身相関」、これが基本となる健康法である。

人間は生命的存在である心・精神によって生きているのである。そこでまず心霊科学

に基づいて自然科学をながめ思考しながら、この上に立つことである。その建前をとった科学こそが近代霊魂学といってよいスピリチュアリズムの思想である。その意味を知るのに手近なものが「神霊主義の七大綱領」である。(注。神霊主義の七大綱領： 神は万有の祖、 人類は同胞、 人間の個性は死後迄も存続、 幽明交通可能、 因果律の厳存、 各人自らの責務がある、 人間は向上する)

真の人間とは、この七大綱領を身につけた人間ともいえよう。これこそが造物主(神)の描いている人間というわけである。

私は、現代の医学のいう「病気」について心霊科学的に分析した。その結果は次の5つの原因によることを知った。そこでその5つの原因を除けば病気は治り、それらの原因をつくることを避ければ健康そのものとなり、無病長寿につながることになる。

5つの原因とは、1) 肉体の使いすぎ、2) 心の問題(心の働きである“意念”の不統制)、3) 食生活の誤り(造物主の御心から外れた食生活)、4) 薬の濫用(薬による不利益とその悪循環)、5) 霊魂の働きによる(未発達霊、悪邪霊、因縁霊などの働きかけ)である。

これによって、人間は無病で、本来病気とは縁のないものという理由が判然としたとおもう。しかし、これらの中で最も理解しておきたいことは、食生活の内容と、霊魂の働きの本質に関するものである。そして健康の背後にはいつも自然治癒能力が流れていることも知る必要があり、それによって病気の心配は必要なくなるということである。

さらに、人間には一人の例外もなく自らの能力に、治病・健康維持にまつわる霊が働いてくれており、その恩恵を受けるためには守護霊が中心にいなければならない。

そして、病気を本当に治すためには、その病人を先天的に守り、指導する霊の力を発揮させる存在として霊癒者がいる。いわば病人の助手とか補助者に相当する。

これに関して、「サイキック・ニュース」の主幹モーリス・バーバネルが次のように述べている。

「心霊治療の根本目的は、本人の心霊力の発現にある。人間には誰にでも自然治癒能力が具わっている。

病気の原因は、霊的精神的な場合が多く、もし心身に不調和があると、自然治癒能力が働かず、病気となる。薬物は一時抑えにすぎず、病気を治すことはできない。それは表面的症状を消すのであって、決して病気の原因を治すわけではないからである。心霊治療の場合は、霊媒を媒介とした霊力が、病人の自然治癒能力に刺激を与え、これにより本人の生命力が働いて病気を治すのである。

ある指導霊の言によると、人の心が霊的に正しい方向に準備されている時にのみに病

気は治るという。だが、病人は病気を起こす条件の方へと逆戻りすることがあり、こういう時には治療は成功しない。通常心霊治療を受ける者は、万策つきてやってくるのであり、これがもし初期のうちに来たら、治癒率は驚くほどよいだろう。ただ、死の宣告を受けてからくるということは霊力の発現に役立つ点はあるのだが、心の準備を整えていなければ期待するほどの結果は得られない。

もし、日常生活において、心身の平衡さえ保っていれば、病気になることはない。ハンネン・スワッファー氏は、『人間は酒を飲み、タバコを吸い、さんざ好き勝手をして身体を傷めつけたあげく、交霊会に来て幸福を願う始末だ』と指摘をしている。人は一度は死ぬ。しかし、病気で死ななければならない理由はない。病気は神が与えるものではなく、人のつくるものだ。健康こそ、霊たるものの本来の姿である。」

このバーバネル主幹の一言によっても明らかである。翻って日本の霊媒とその周辺の人々の態度はどうであろうか。大いに考え、反省の必要がある人がはかなり多いのではなかろうか。